

ある時、神様が、パウロの手によって異常な力あるわざを行い、パウロが身につけていた手ぬぐいや前掛けによって次々と病人を癒されました。驚いたユダヤ人のまじない師や祭司長スケワの七人の息子たちはパウロの真似をして、酷い目に遭ってしまいました。

病の癒し、悪霊払い。私たちの興味をそそる話です。しかし、今日の話には続きがあります。「また信者になった者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあけて告白した。それから、魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきたは、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった。」(18～19節)

今日の箇所が伝えようとしている「異常な力あるわざ」とは、病の癒しや悪霊払いそのものではなく、それらによってもたらされた人びとの心の内側からの変化と、その表れとして起こった生活全体の外側の変化です。

この時、人びとが焼き捨てた本は銀五万にも上りました。現代の金額にすると5億円と言われます。彼らは、それだけのお金をつぎ込むほどに魔術に魅せられ、心と生活の大部分を捧げてきました。それなのに、今や強い思いを込めて、魔術の本をみんなの前で、火の中に投げ込んだのです。

公衆の面前で、これまでの自分と決別せずにはいられなくなる姿は、自分の口で信仰を言い表し、教会の礼拝の中で洗礼を受ける姿と重なります。彼らが言い表した彼らの行い、また手放した魔術とは何だったのでしょうか。

「魔術」とは、この世離れした響きを持つ言葉でありながら、とても身近なものです。昔から私たち人間は、自分の願いを自らの手で叶えたいという願望によって、名前は違って、人間の力を超えた神的な力を欲してきました。しかし、自分の願望を満たすために命やお金を費やす生活は、かえって自分の中に眠っている欲望を刺激して、ますます掻き立てられていく、欲望に支配された不自由な人生へと繋がります。多くの魔術の本を抱えて、疲れ果てた人びとの姿は、私たち自身とも重なります。

しかし、そのような人たちに変化が起こったひろまり、また力を増し加えていった。」(20節) 彼らの生活を変え、ますます盛んにひろまり、

力を増し加えていったのは、「主の言」だったと。人びとはパウロを通してなされた異常な力あるわざにしか注目しませんでした。しかし、パウロがこの場所で、全力を傾けて行ってきたことは、主の言を語ることでした。

パウロが身につけていた前かけや手ぬぐいは、当時、医療行為を行う時に包帯のような役割を果たしたと言われていています。パウロは、会堂で主の言葉を語りながらも、人々の具体的な痛みに寄り添い、自分の持っているもので医療行為を行うことを通しても、主の言葉を伝えていたのかもしれない。

かつて、日本に来た宣教師たちが、神様の愛に基づいて人と関わることのできる病院や学校を立てながら、主の言葉を伝えた姿と重なります。あなたは愛されている。神様が、その独り子を捧げるほどに大切な存在。そう言葉で伝え、人々の傷口に触れ、教育を通して証しながら、神様の愛を伝えたのです。

私も、あるキリスト者との出会いを通して教会に導かれました。その方といると、自分は大切な存在なんだ、と感じることができ、礼拝に行ってみようと思えました。主の言葉を語ること。それは、難しいことではないのだと思います。出会う一人一人を覚えて祈り、イエス様の命が捧げられるほどに尊い存在として接し、言葉をかわしていく。そんな私たちを通して、神様ご自身が働いてくださるからです。

今日の聖書箇所は、使徒行伝が繰り返し語る大切なこと、聖霊なる神様が主役となって活動しておられることから語り出します。「神は、パウロの手によって」(11節)神様は、色んな痛み苦しみを抱えていた人たちのもとにパウロを遣わして、語る言葉、その手のわざを通して、出会っていかれました。

私たちも今朝、同じ主の言葉を聞いています。主の言葉は私たちを魔術的な力を欲する心から解き放ち、神様と人を愛し、仕えるための自由な心と生活に造り変えてくださいます。そして、そのような私たちから、今週も主の言葉が語られ、証しされ、私たちの周りの人たちに、異常な力ある神様のわざがもたらされていくのです。